

まちの芸術家に会いに行く

榮水亜樹さん



自分が描いているというより、何か大きなものに動かされている気がするんです。

作品名: 守る / 撮影協力: MA2 Gallery

小学4年生のときに 画家になると決めていた

遠くからは蚊帳の形が浮き出ているように見える。絵に近づくとつれ、おびただしい数の点で構成されていると気づく。しかも点は静謐な光を放っている。点を描いては剥がし、新たな点を重ねていく。気の遠くなるような作業から生まれた立体感が、見る時間帯や角度によって絵の印象を変えている。

不思議な魅力の絵を描く画家の榮水亜樹さんは、生まれも育ちも春日部だ。

「子どもの頃、市内の彫刻をよく見ていました。お気に入りのはうさぎの彫刻『おでかけ』。ベンチのある彫刻『小さい花』にも座って遊んでいましたね」

画家を目指したのは小学4年のとき。「『将来画家になる』と作文に書きました。親がそんな私を美術館に連れて行ってくれ、本格的な絵画と出合いました」以来、印象派やピカソ、クレモニーニなどに影響を受けてきた。

「小さな頃から反復作業が好きで、細かいものの集合体を描くことが多かった。線で何かを描こうとすると右に引くのか、左に引くのか、意志が入るけれど



手に持っているのは、紙粘土とアクリル絵の具で作ったオブジェ「手がかり」。

点は違う。筆を下ろすと大きな点ができたり、小さな点ができたり、意志が含まれない。そこが面白い」



キャンバスに一点一点、点を描いていく。乾いたら一度剥がし、また色を重ねる。

古利根川沿いの散歩で イメージを膨らませることも

食事の時以外は、ずっと無心でキャンバスに点を打ち続けることもある。

「自分の中から湧き出るものというように、先に作品があり、何か大きな力によって描かされている感じがします」

制作の間には、古利根川沿いを散歩し、イメージを膨らませることもある。

「水面の波打つ感じとか、自然を見るのが好きですね。八幡橋あたりから見る夕景はいつ見ても感動します」

今後この地で作家活動を続けていきたいと語る榮水さん。将来が楽しみなアーティストだ。

PROFILE

1981年生まれ。春日部市在住。2007年東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻油画修了。「VOCA展2015 現代美術の展望—新しい平面の作家たち」(上野の森美術館・2015年)、「New Vision Saitama 4—静観するイメージ—」(埼玉県立近代美術館・2011年)他に出品。